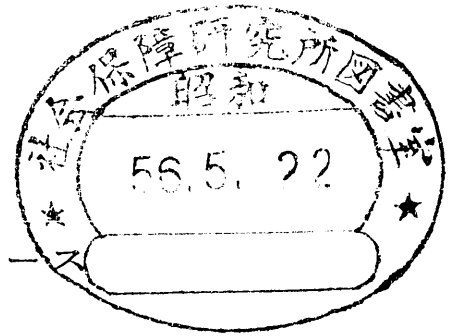




ライフサイクルとライフコース

森岡清美

10年ほど前から、人間の発達に関心があるアメリカの社会学者の間で、ライフコースという用語が静かな流行を来しているようである。学者によって多少の相違はあるが、人によっては、ライフサイクルの語をはっきりと捨てて、ライフコースの語に転じた例もある。

ライフサイクルの発想は、周知のように、イギリスのラウンツリーやロシアのチャヤノフ以来の80年に及ぶ長い研究史をもっているが、ライフサイクルの用語そのものは、1930年代のアメリカ農村社会学者の研究物に登場したのが発端であろう。使用され始めた頃は、きわめて漸新な印象を与えたに相違ない。しかし、植物や動物にみる生活環と異なって、人間の場合サイクルは実態というよりは比喩である。結婚で開始され夫婦の死亡で終わる一代限りの家族のどこに、サイクルが見出されるのだろうか。親の世代から子の世代へとくり返されてゆく、あるいは同一世代に属する異なる個体の間でくり返されている、といった比喩的な意味でしか、サイクルを認めることができない。

サイクルの発想が含む「くり返し」の観念も、アメリカの研究者たちの発達的人間観となじまない。第2次大戦後、家族発達という語が登場し、家族のライフサイクルという慣用語の使用が控えられるようになったのには、このような背景があったものと推測される。

それでもライフサイクルの語が用いられつづけ、用いられずとも家族発達の概念のなかにその発想が大体において吸収されていた。ところが家族のライフサイクルという発想に、近年もう一発のパンチが炸裂したのである。

その批判によれば、家族のライフサイクルの発想は、絶えず段階設定と結合しているため、学者が設定した一組の段階をつぎからつぎへと辿らない家族は考察の対象外となるが、無子夫婦や離婚・再婚の多い今日、それでは家族の実態を捉えたことにはならない。また、家族を一枚岩のような集団とみ、そうした家族集団自体にライフサイクルを想定していることも、実はより基本的な問題点であって、むしろ家族を相互依存的経歴をもつ個人の組合せとみるべきだという。

このような批判と問題意識を担ってライフコースの概念が登場したのである。ライフコースの概念は、まず個人の一生の軌跡に注目する。個別・特殊でありながら、世代の刻印を共通にもつ個人の一生の道行きに目をとめるのである。しかし、モナド的な個人を考えるのではない。長年にわたり生活を分かちあった配偶者や近親、そして親しい友人たちとの「是非ない」つながりの中にある個人であり、このつながりの中でさまざまに啓発されて成長する個人なのである。個人の一生は、是非ないつながりのある人々の一生とからみあい、相互に依存しあい規定しあう。そこに近親者の一生の組み合わせとしての、家族のライフコースも、浮き彫りにされてくる。

個人を出発点とするライフコース概念の適用は、わが国にはまだ早すぎるかもしれない。むしろ、家族自体の、あるいは世帯自体のライフサイクルを観察することに、まだまだ精力を注がねばならないのかもしれない。しかし、家族のライフサイクル研究をもう一度活性化するためにも、一度個人から出発しなおしてみること、そして段階設定に固執せず、個人が一生の間に経験する分岐点の、家族成員間での時間的複合状況を観察してみることにあたりから、新しい研究を試みる必要があるように思われるのである。